

7 火 葬

葬式を友引の日になると七人死ぬなどといって友引の日はさけた。古くは土葬であったが、衛生上の見地や土地が狭く充分に墓地がとれないので早くから火葬が一般化した。

棺を組の男性がかついで寺まで行き、葬儀をすませて火葬場に行った。翌日、近親者は骨拾いといって竹箆と木箆を用いて、アイバサミで拾い骨壺に納め、再び寺で経をあげてもらい墓に納めた。

三重では墓を土盛りにして位牌をのせ、三日参りにトウバを立てて三日垣をつくった。

8 忌 中

死後四十九日間は「ヒがかぶつとう」という。ヒとは忌みのことで、この期間は遺族は忌みの生活に服し、神前（鳥居をくぐらぬ）や晴れがましい場所に出ず、神棚や写真に白紙を貼って汚れが及ぶのを防ぐ。

三日詣りの翌日から初七日まで、親戚や組の人々は御中陰といって毎晩お詣りをする。野菜のゴマアエや豆・丸ボーロ・オケソクさんなどを出す。二七日・三七日以下、七日ごとにオヨイをし七七、四十九日は忌明けで盛大に供養をする。また、初立日・二立日・百カ日にも追善供養をする。

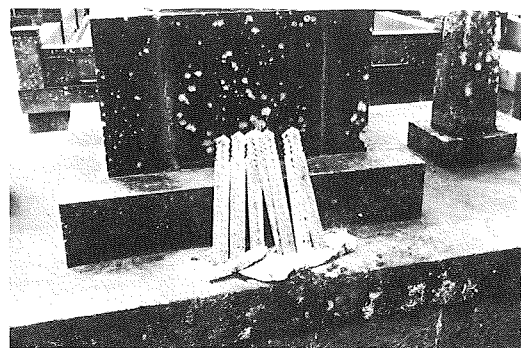
三 年 中 行 事

毎年、同じ日に繰り返し営まれる行事は、長い歳月にわたって定着してきたものであるが、春夏秋冬と四季の移り変わりがはつきりしている風土を背景とした生産労働のうえに生みだされたものである。

農耕生活を例にとれば豊作を予祝し、災厄を祓い、収穫を感謝するといった一連の行事が行われる。これらの行事は農耕生活から導きだされたもので平常（ケ）の生活のなかに晴れ（ハレ）の日を折りこんで生活の区切りとした。晴れの日は平常の労働から解放された休み日で、静かに忌みつつしみ神の来臨を願って、神と人とが相ともにいただく（共同飲食）日である。神祭りをすべき晴れの日に、休まずに田畑にでて仕事をする者は「ふゆう坊の節句働き」といって非難された。

ここに記録した行事の多くは、既に廃絶したものや生産労働の変化により形を変えたものが多く、また、調査が町内全域に及ばなかったことにより、特定の地域にかたよってしまったことをおことわりしておく。

明治五年の暦制改革で従来の太陰太陽暦（旧暦）が廃止され、太陽暦（新暦）が採用された。農村や漁村における年中行事は実作業に即して行われていたので、新暦にそのまま移行することができず、新暦、旧暦、あるいは新暦のひと月遅れとまちまちになった。とくに漁業は月のみちかけと深い関係があり年中行事もそれに即して行われていた。



トウバ（三重・円城寺）

(一) 正月行事

1 正月準備

一年の初めの月を迎えるにあたって行われる行事は、他の行事に較べて準備から終わりまでの期間が長くその種類も多く、行われる日も集落により新暦旧暦あるいはひと月遅れと多彩であった。商業津諸富津では新正月、農村部の小杭では二月一日、農村部の搦は漁から帰ってくるのが旧正月の七日頃なので七日正月であった。農村部では農作業の関係で気分的に新正月では休めなかった。

正月は年中行事のなかで最も大切なものであるので迎えるための準備期間もながかった。十二月十三日を正月の用意にとりかかる日として鰯の料理（鰯ナマスという）をつくり、奉公人はこの日から生家に帰るのがならわしであった。

(1) 煤払い・墓掃除

神棚をはじめ、日頃手のいき届かぬ家の内外の大掃除をし障子の張り替えなどをした。また、先祖の墓を掃除しツンノハ・ナンテン・松・柴



餅つきの準備 (上大津)

などを供えた。

(2) 餅つき

数日前からカイボシキイといって堀の柳や枯れアシを集めて燃料とし、四、五軒が一組となつて餅つき仲間をつくり早朝二時頃からつき始めた。供え餅のほかにも食用の碎餅などを一人当たり一俵もつので数日を要した。新嫁を迎えた家では一俵餅をつき、二重ねの嫁くさん餅にして嫁の里に贈った。

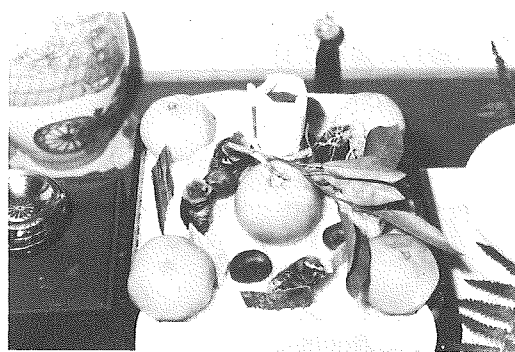
諸富津では農家から餅つき人がきていた。人糞をやっていた農家からタンボ代（肥料代）として一、二俵の餅米をもらっていた。

二十九日は苦に通じるといって餅つきを避ける家庭もあった。

(3) 正月飾り

◇飾りをする家庭は一般的に少なかったが、商家では◇飾りと根びきの松をしていた。床の間にはイワシを添えた年取り餅（御鏡餅）やテカケを飾る。テカケは家庭によって違いがあるが、三方に一升ほどの米を盛り中央にダイダイを据え、カラスミを半紙で巻き水引でくくりトコロを添えて立て、回りにミカン・ツイガキ・スルメ・コンブなどを置く。三重では、テカケに用いる品を「ダイダイユズリテ・コノトコロニスミ」といった。石塚ではツイガキとミカンを家族の数だけ並べて年取りのときに戴いた。

正月を迎える神は歳徳としとくさんといひ、庭中に据えた臼のうえに箕をのせ真中に一重ねの餅にオヒカリを添えてそ



テカケ (諸富津)

年の恵方に向けて飾った。また、農具や包丁などにも餅を供えた。

ヘッチイさんには荒神さん餅といってヘッチイの形をした餅を三つ重ね、カブを添えて供えた。

(4) 借金返し(菓代払い)

医者への菓代など借金返しをする。正月と盆の年二回の支払いで集金は夜十二時頃までしていた。

2 大晦日

家族全員が揃って年越しをする。年越しの膳には運ソバを食べる。

3 大正月

(1) 元旦

年取りといって、早朝に起き若水を汲み年寄りから順に顔を洗い、朝風呂で身を浄め家族一同衣服を改めて神仏を拝み、氏神社へ詣り一年の無病息災・豊作・豊漁を祈願した。

年取りが終わるまでは戸を開かず、掃除をしたり、塵を掃き出したりせぬものとされ、お金も使わなかった。

新年最初の訪問者が男だと縁起がよいといい女は忌まれた。妊婦のいる家では最初に訪れる人によって男女の別を占った。

(2) 仕事始め

正月二日は仕事始めで、農村部では早朝二、三時に競争して起きて縄ない、ワラジ、ゾウリなどをつくって仕

事の始めとした。また、鍬入れといって苗代田にツンノハを立て土寄せをした。

仕事始めが終わると二日商いといって商店へ買物にでかけたり、金立さん(佐賀市)や風浪さん(大川市)ミヤイ(詣り)をした。風浪さんに詣ると風引きをしてもたやすいといった。

(3) お初い

七日頃までにお仏前参りとして嫁いだ娘や分家した者が本家に正月の挨拶に行く。

4 七日なん正月か

(1) ホンゲンギョウ

鬼火焚き・焚き始めともいう。子供たちが六日の夜に田の中などに竹を組み藁をかけて小屋をつくる。小杭では源内屋敷より青竹を切り出した。

七日の早朝にこれを燃やし、三重では竹の音が鳴るごとに「鬼は外、福は内」と叫んだ。歳徳さんに供えた餅を七カ所で焼いて食べると息災であるという。

長男の生まれた家では、ニワナカホンゲンギョウといって庭中に恵方に向かってユルリ(炬)をこしらえて、小路の子供たちを招き、餅を焼いたりゼンザイをつくってふるまった。初息子の子供仲間への仲間入りであった。

(2) 七草粥

ありあわせの若菜とテカケの米で七草粥をつくり神仏に供えて食べた。

(3) 七福神

加与丁・為重では、子供たちや青年が七福神（布袋・毘沙門天・福祿寿・弁財天・寿老人・恵比須・大黒天）に扮して各戸を訪れ祝言（不明）を唱えて餅や菓子をもらった。

5 御正忌さん

真宗地域では開祖親鸞の忌日にちなんで、一月九日の晩より十六日まで各寺院で法会が行われる。信徒の家では鍋や釜の底まで磨きあげ生臭物をさけ精進料理で過ごした。精進あげにはイワシを食べた。



ニワナカホンゲンギョウ (陣内)



御正忌さん (東寺井・光専寺)

6 帳祝い

十一日に商家では新しく帳面をつくって、帳祝いをした。

7 もぐら打ち

十四日の晩に子供たちが竹竿の先に藁を束ねたもぐら打ち棒を持って、各戸の庭先で円陣をつくり歌をうたいながら、その家の繁昌を祈っていつせいに地面を打つ。とくに子供の生まれた家や新嫁を迎えた家で打った。

へ十四日のもぐら打ち

シヨ・ヨンドン シヨ・ヨンドン

包丁借しやい 茶ア飲みやい

ヨ・サヤ・嫁ごとって シヤイコミヤイ シヤイコミヤイ

へなれなれ柿の木 ならずの柿をばなれとぞ祝う

千なれ万なれ億万なれ 虫きいすんな 枝おれすんな あだ花咲くな

よそんもんのちぎつときや 堀の真中なれ

うちのもんのちぎつときや 畑の真中なれ

十四日のもぐら打ち

8 掛け薦

一日から十六日まで掛け薦といって新しい薦を庭先に張っていた。

9 やぶ入り

十六日に、奉公人は休暇をもらって実家に帰って休んだ。

10 二十日正月

二十日恵比須と違って、各集落では恵比須さん祭りをする。古くは子供たちが恵比須さんを奉じて道路に縄を張り通行人がさい銭をあげなければ通さないといういたずらをしていた。

11 年取り直し

厄年など年回りの悪い人は二十日正月または新暦と旧暦の二回、正月の手数をして年を余分にとったようにした。

男は四十一歳、女は三十三歳を、とくに災厄の多い年として厄払いの祈願をする。男性は厄入りるときに、伊勢講仲間が厄入りの祝いをしてくれるので厄あけには仲間を招いて宴をする。

女性には里からウロコ柄の帯が贈られた。ウロコは落ちることから厄を落とすことに通じるのであろう。女の三十三歳とは道連れもするな、一九歳で結婚すると難産するなどという俗信もあった。

(二) 春の行事

1 ももて

年の初めの魔払いと年占を兼ねて鬼と書かれた的を弓で射る神事まといで的射・弓射りともいった。一部廃絶した集落もあるが、加与丁・陣内―一月十八日、石塚―一月十九日、舟津―一月二十六日、徳富―一月二十八日、太田・大中島―二月十一日に行われている。

陣内・太田・大中島では弓を射る行事は早く絶えたらしく古老の記憶にもない。現在は氏神社に各組のスプソ(元方)が集まり悪疫退散・五穀豊穰を祈願する。

弓を射る神事が残っている石塚では、旧一月十九日(現在は近い日曜日に)的射といって公民館(天満宮)で行う。若宮神社と天満宮での神事後、径一辺いづらの的(裏の中央に鬼と書く)を据え、一〇ほど離れた所からめいめいの的を狙って弓を射る。

小杭では弓射りが終われば、子供たちが争って鬼という文字を奪いあつ



ももて (石塚)

た。この文字を取れば健康になるといわれた。

2 初 午

二月初めの午うまの日は稲荷の祭りとして全国的であるが、女の子がカモジ草うま（えのころぐさ）に自分の髪を数本くわえて白紙で包み、

へこの川や この川や 長さ広さは知らねども 流るる先までのべよ黒髪と唱えて川に流すと髪の毛が黒く長くのびるといわれた。

3 粉つき十五日

釈迦入滅の日という旧二月十五日にコーバシをつくって食べた。大麦や屑米を炒ってヒキウスやヨコギネでついてシイノ（籬）にかけ、柿の皮を干して粉にしたものや砂糖を混ぜてツケ竹やベンコ（柴）の葉ですくって食べた。急いで食べたり話しながら食べてコーバシをこぼすと「コーバシ こぼすぎい ノミのでくつ」といって、釈迦の命日におしゃべりをいませめた。

野町ではゴーヘラシ（業へらし）といつて、老女から若嫁が集まって行い、夕方には皆で夕食をして楽しんだ。



涅槃会（太田・慈広寺）

4 粥 試 し

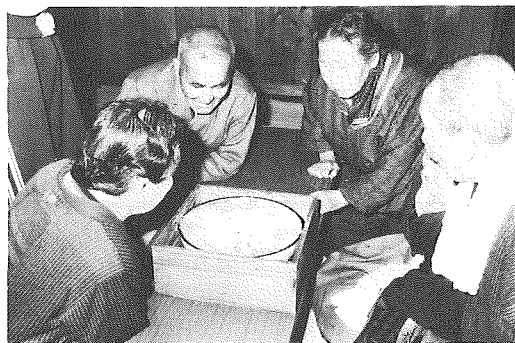
また、太田の慈広寺（曹洞宗）では、本堂に涅槃図を掲げて釈迦の遺徳を慕ぶ。

粥に生じたカビにより農作物の作柄や天災地変・流行病気などを占うもので各集落の神社で行われる。粥は一升の米を炊き平鉢に入れ東西南北と位置づけをして箱に納めて神前に供え一カ月後に開いて、カビの色具合いや状態を見て占う。黒や青カビは吉で豊作、赤カビは凶で火事や交通事故、水分が多ければ水害、ヒビ割れがあれば旱害の恐れがあるといい、鉢の中心を神社とみなし今年はどの方面がいいとか用心をしなければいけないなどと占う。

為重では旧一月二十日に粥を炊いて旧二月十五日に粥開きをする。大堂神社では三月の初卯に粥開きをするが、小杭では卯の日が月に三回あるときは中の卯、二回のときは初卯に行われる。



粥 試 し（三重・新北神社）



粥 試 し（為重・八坂神社）

5 桃の節句

三月三日は女の子の節句で、ふつ餅(ヨモギ餅)をつくり桃の花を添えて神仏に供え、親戚などに配った。今日、見られるような雛飾りをする家は少なかった。また、この日にタニシを食べると流行病気をしないともいった。

為重では馬節句といって、千代田町の若宮神社に馬をひいて参詣し馬の健康を祈願した。

6 彼岸籠い

春分(秋分)を中日として、その前後各三日の七日間を彼岸という。寺院では彼岸会の法要が行われ、家庭ではヒガンダゴをつくり神仏に供えて先祖の供養をする。

観音堂には集落の婦女子が集まってお茶講をしたり、氏神社の境内に筵をしいて酒肴を持ち寄って彼岸籠いをする。

7 花見

桜の花が咲くと仲間や思い思いに花の見ごろを選んで蓮池公園や小城公園に酒と肴を持って花見にでかけ、春の一日を楽しんだ。

潮干がり(後述)とともに、農耕開始前の骨休めであった。

8 甘茶とり

釈迦の誕生日といわれる旧四月八日(新五月八日)に寺院で降誕を祝して行われていた。男児は花抜きといって、シュンギク・キンセンカ・レンゲソウ・シャクヤク・松の芯などを各戸よりもらい集め花御堂をつくり誕生仏を安置する。参詣人は甘茶を頭上からそそぎ甘茶をうけて帰る。うけて帰った甘茶は、クチナワ(ヒラクチ)除けに家のまわりにまいたり、目や頭など体につけた。

9 ごみくい (泥土揚げ)

三月下旬から四月上旬にかけて用水堀の泥土揚げを行う。堀の貯水能力を高めるとともに揚げた泥土が乾くと砕いて水田にひろげ(客土する)天然肥料とした。

ウウポイ(大堀)では足踏式の水車を三段に据えて水を堰の外に排水し、丸太で足場を両側に組んで数人ずつ分かれて長い綱のついたゴミクイ桶を堀の中におろしてゴミがはいると綱を引いてくみあげた。

ゴミがとり除かれると鮎・鯉・うなぎ・なまずなどたくさん魚が獲れた。終われば獲れたばかりの魚で泥おとし・しみゃあ酒が行われ、楽しみな行事でもあった。



ごみくい(上下)

10 ひゃあらんさん参り・川神さん祭り

四月下旬から五月の初めに川の水が増えはじめる頃、子供の水難防止を祈願して参拝や祭りが行われる。

川副町南里の通称ひゃあらんさん（八幡神社）は水難除けの神としての信仰が厚く各地から子供連れの参拝が多い。

陣内では田ん中の泥をひとつかみ持って行き、ひゃあらんさんの前の小高い丘の頂きに泥を置いて参拝した。また、陣内の氏神社若一王子も水難除けの信仰がある。

徳富や渡端では神主を招いて祭りをし子供たちの頭に塩を撒いて安全を祈願した。

三重では川神さん祭りといって、半紙に川魚（フナ・ドジョウ・ナマズなど）と夏野菜（キュウリ・ナスなど）を描き、ワラ（藁）ツトに肴、竹筒に神酒を入れて堀に立て灯明を添えて供えた。

11 春祭り・お籠い

レンゲソウの咲く頃は春祭りやお籠いなど野外での行事がたくさん行われた。

新北神社・太田神社・西の宮社（佐賀市）などの春祭りは露店もでて非常な賑わいを見せていた。

また、各集落では氏神社の境内、広場、田ん中、荒籠といったところにゴザを敷き、お籠いと称して弁当持参で酒盛りをした。

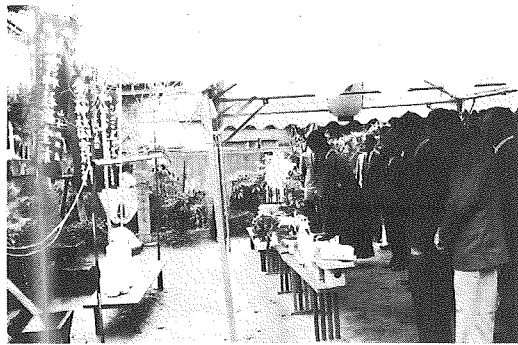
搦では旧四月八日（小汐の頃）に龍宮祭り（漁祭り）といって龍宮仲間十数人が世話役となって昼は青年の相撲大会、夜は芝居をやつて奉納した。現在は四月末から五月初めの休日を利用して行われる。

12 潮干がり

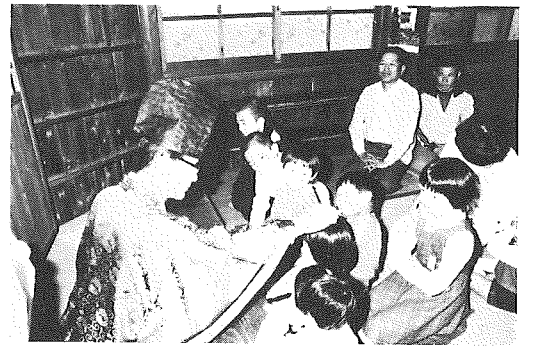
四月末から五月にかけての旧一日と十五日を中心に数日間は潮がよく引くので有明海の沖に掛けて潮干がりをした。仲間同士が酒肴持参で芸者を連れ、太鼓三味線で賑わいながらでかけた。アサリ・シヤコ・ウミタケ・タコなどがよく獲れた。農家は農作業前のひとときの休みであった。

13 馬ふせ

馬使いの始まる前に伯楽さん（獣医）が、焼きごてを馬の背中にあてて体調を診た。馬使いが終わつてするところもある。



龍宮祭り（東搦）



ひゃあらんさん（徳富）

(三) 夏の行事

1 幟のぼい節句

男児の成長を祝って五月五日に行われる。菖蒲しょうぶを湯に入れて沐浴したり、ひまし庇にのせたりする。長男の生まれた家では里や親戚から贈られた幟や吹流しをたて、これらの人々を招いて幟祝いをした。

大中島では、馬追い節句といって、馬を連れて氏神社に参り、その後、馬を村に放すと子供たちが、これを追った。

2 大般若

太田の宝光院(天台宗)では、五月十三日に五穀豊穰・家内安全を祈願して大般若経(大般若波羅蜜多経 六百卷の転読が行われる。天台宗・禅宗の僧七、八名が、各巻の初めと終わりの部分を声高に読誦し右から左に左から右にとめくり、参詣者は経典で肩や腰を叩いてもらい健康を願う。転読後、祈禱札を集落の境に立て邪霊の侵入を防ぎ、堀に立てて



大般若 (太田・宝光院)

子供の水難防止を願った。

3 御誕生日

真宗地域では、五月二十一日に開祖親鸞の誕生日を祝って、門徒中が集まってお籠りをする。諸富新村では、区長宅の角にムシロを敷き、この頃とれる夏豆(ソラ豆)や肴を持ちよってお籠りをしていた。

4 田の神さん

稲つくりのもっとも大事な田植えが近づくと、丸い握り飯にメノハ(ワカメ)を巻いたタノカミサンニギイメシをつくり、神酒とともに神棚に供え、馬使いさんに食べてもらい田植え加勢をうける家にくばった。三把苗をヘッチイさんに供える家もあり、この苗は盆の仏具磨きに使用した。

また、田に水を入れる荒ぐれにあたって、アラグレダゴをつくったり、苗取りや麦打ちにもダングやオハギをつくり、加勢をうける家にくばったりした。

5 施せ餓が鬼き

三重の円城寺(黄檗宗)で五月下旬に施餓鬼法要が行われる。餓鬼道に落ちて苦しむ亡者のために飲食を施すもので、もとは盆行事の一つとして八月十七日に行われていた。

本堂の前に餓鬼壇をつくり、中央には浄飯をうず高く盛り、果物やマンジュウ、五色の小幡を立て、僧侶七、八名により法要が営まれる。

6 さなぼり

田植えが終われば、餅やお萩をつくり、田植え加勢をしてくれたところにくぼったり招いたりして、田植えじまいの祝いをした。この日に三把の苗をヘッチィさんに供えるところもある。

7 馬あづけ

田植えが済み馬仕事が終われば、馬を蚊の多い平野部を避け、過ごしやすい北山（三瀬村・富士町）や菊池郡（熊本県）に預けた。秋になると鞍にさつま芋を積んで帰ってきた。お礼に夏豆をやっていた。

8 祇園

夏になると、伝染病や風水害・病虫害などが流行りだす。これらは悪霊・怨霊のせいだと考えられた。旧暦六月に多い夏の祭りは、祇園さんと呼ばれ悪霊を鎮める祭りです。本来は牛頭天王を祀る祇園社（八坂神社）の祭りであるが、氏神社をはじめ、小路毎に祀られる観音・地藏・恵比須・太神宮などの祇園が行われる。

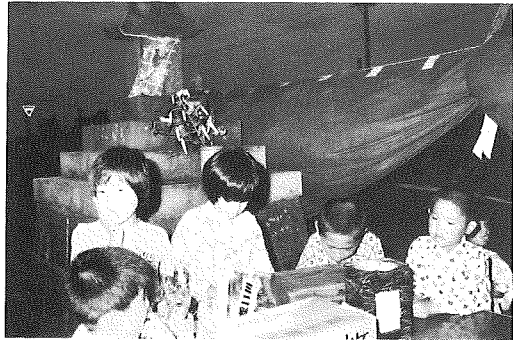
氏神社の祇園では、たくさん

露店が並び夜は芝居や花火大会があり賑わった。小路毎に行われる祇園は、子供たちが中心となり豆を抜いて行うので「豆祇園」とか、提灯をたくさんさげるので「千灯籠」ともいう。

例として諸富津における祇園を見てみると、七月十七日―観音さんの祇園、七月二十日―恵比須さんの祇園、七月二十五日―天満宮

の祇園、八月四日―龍王さんの祇園と各区で行われる。観音さんの祇園は、男児が観音堂の掃除、提灯の張り替え、幟の準備、豆抜きなどをする。豆抜きは農家がないので諸富津村まで出かけた。子供の生まれた家では提灯に名前を書いて奉納した。祇園が終われば、子供大将の家で混ぜ飯をしてシメイワイ（終い祝い）をした。龍王さんの祇園は、子供たちがお飯屋を洗い、新若組（青年―中老ともいう）に頼んでお飯屋を建ててもらった。

氏神社で行われていた祇園は、最近廃れたが、子供たちが世話をする豆祇園は、参拝人も多く現在も各集落で行われている。



弁財天の祇園（徳富・松土井）



恵比須さんの祇園（大堂津・田代）



施餓鬼法要（三重・円城寺）

八月七日に牽牛けいぎゆうと織女おりひめの二星が、一年に一度だけ相会うという伝説にあやかって、字と裁法の上達を願って行う。朝早く起きて稲や芋の葉から朝露をとって墨をすり、短冊に願い事を書き、女兒は色紙で着物をつくり笹竹に吊るし庭先にたて、マンジュウやダンゴ、菓子、西瓜などを供える。

大堂津ではヤグラをつくり、七夕の掛軸をかける。

10 盆

八月十三日から十五日にかけて祖霊を迎えて祀り、送るといふ一連の盆行事が行われる。盆の習俗は宗旨や家庭により違いがあることをおことわりしておく。

初盆の家では盆月になると一日から軒先や縁側に迎え提灯を下げる。一般の家庭では十三日に下げる。天気の良い日に堀のコモを切り乾かして精霊しょうろうゴモを編んだ。仏具は、さなほりに供えた荒神さん苗をソーラ(たわし)にして磨いた。

十三日の精霊迎えは、夕方になると迎え火を焚いたり、子供たちが、フーズキ提灯をつけてお寺や河岸へお精霊さんを迎えに行き、背中が重くなったら帰り、この夜は遅くまで起きていた。迎えられた祖霊には、御駐走が供えられ多くの人から供養をうけて祀られる。初盆の家には親戚や知人から、提灯やソーメンなどが贈られる。天台宗や禅宗の家庭では、盆の期間中、三度のお膳立てをする。

精霊送りは十五日の夜に行う。初盆の家ではワラやコモで精霊舟をつくり供物(ソーメン・西瓜・菓子瓜など)を入れてフーズキ提灯をともし、潮の引くときに流す。

〔盆の習俗〕

施餓鬼 餓鬼道に落ちて苦しむ亡者に飲食を施す法会で盆行事の一つとして、盆の前後に行われることが多い。太田では盆の前に行っていた。経がすむと花とりといって子供たちは短冊を争つてとる。この短冊をとると体が強くなるとか、よいことがあるといわれる。

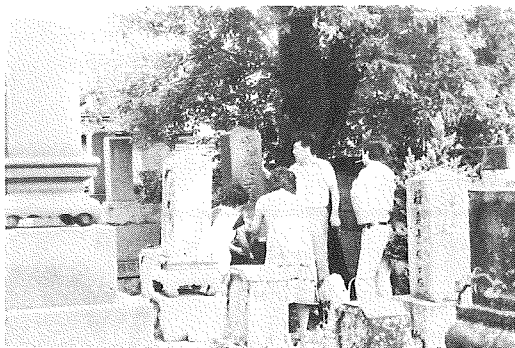
三重では、十七日に送り施餓鬼として行われていたが、現在は五月の行事となっている(5 施餓鬼参照)

盆カタビラ 盆詣りには、カタビラの紋付を着ていた。嫁の里帰りは、盆カタビラを着せて乾タラを持たせていた。

ボンポイワツショイ・提灯あげ 盆の間、男児はボンポイ(ボンポリ)、女兒はフーズキ提灯を持って



迎え提灯 (石塚)



墓参り (加与丁)

行列をつくり「ボン

ボーワツシヨイ」の

掛声をかけながら集

落をまわる。(女兒は

「提灯トトロ」と

いう) ボンボーイは一

辺ぐらいの青竹を四

つに割って枠とし回りに紙をはり、中にローソクをつけたもので、も

とは二辺ぐらいの大きなものもあり、表に武者人形の絵を描き、火を

入れるところは火の用心と書いていた。

昭和三十年代ぐらまでは為重・寺井津の各集落で行われていたが、

現在は石塚・東搦で行われているにすぎない。

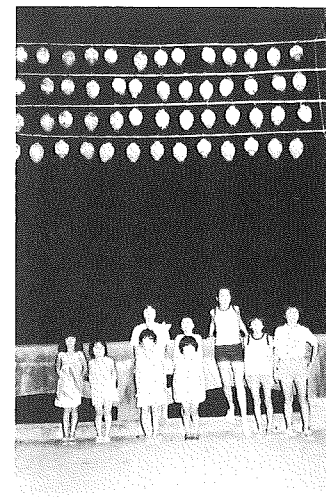
寺井津の各集落では、提灯あげといって恵比須さんなどの前に豆提灯をたくさん並べて子どもたちが火のつけ

かえをする。

洗水遊び 小杭では盆の間、男児が小路毎に山王さんと白石神社に集まり、洗水(池)を掘り回りに盆提灯や

高張提灯で飾り、噴水や水車をつくって水遊びをした。盆の十五日はデーモン(台物)といって、仕掛花火をし

ていたが、これらの行事も明治末に絶えた。



提灯あげ (東寺井)



ボンボーワツシヨイ (石塚)

11 やぶ入り

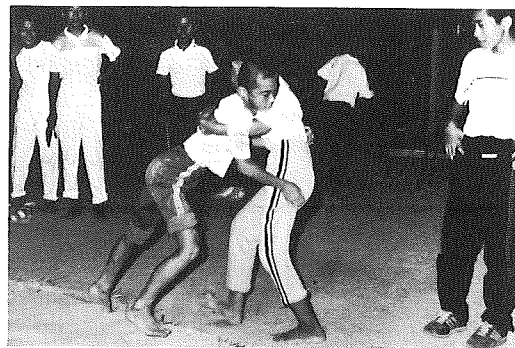
盆の十六日は奉公人の里帰り日で、この日は土産をたずさえて実家へ帰った。

また、消防団の集まりがあった。石塚ではこの後に子供たちによる相撲が行われていた。現在も相撲は続けられており、小学生から中学生の男児が集まり中学生が世話をしている。

12 虫追

田に発生するサバイ(うんか・浮塵子)などの虫を追うもので、大正末頃まではミ(箕)やセキタンガン(石油空缶)を叩いてカクアゼ(画畦 三尺ぐらいの幅で馬を曳いて通れる畦道)を回っていた。

また、ムシアライ(虫洗い)、サバイ払いといって種油・石油を田の水面にまいて株元の虫を藁ボウキで掃いて落とした。この方法は、油さしで水田に一滴、二滴と油を落とし、油が水面いっぱいになりひろがって膜をつくったうえに、虫が落ちると、油につつまれて気門を閉ざされ呼吸ができなくなって窒息死するのであった。サバイは、ちよつとゆだんすると一夜で稲はやられてしまった。これも第二次世界大戦後しばらくしてなくなった。



童相撲 (石塚)

(四) 秋・冬の行事

1 綾部さん詣り

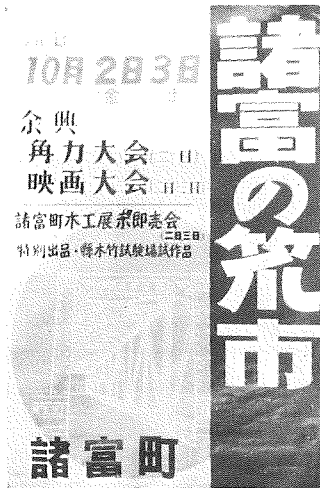
七月下旬から九月にかけて中原町の綾部八幡神社に風よけの祈願に行く。とくに二百十日頃は、稲の開花期に当たり台風の影響時期でもあるので集落中で参詣するところが多い。境内では豆腐煮で名物のヨゴレモチで昼食をとる。

2 名月さん

九月十五日の夜は豆名月ともいって、さや豆(畦豆)をゆでて縁側に飾って満月に供えた。

3 ザル市

旧八月十二日に諸富津一带に、ザルや陶器、農具などの市が並び、大荒籠ではサーカスや見せ物小屋も立ち大変な賑わいを見せた。



ザル市の案内

農民の豊作を願う潮くみ行事にちなんで行われるもので、北茂安町・三根町・千代田町などの各地から諸富へ、たくさんの人々が集まるのを目当てに行われたものといわれる。

ザル市の名の通り、川久保ソーケ(佐賀市)や義経ソーケ(福岡県八女市)などの竹細工品が中心であった。

4 おくんち

氏神社の秋祭りを、おくんち(お宮日、お供日、お九日)というが、これは九月九日の重陽を尊んでいったもので九日、十九日、二十九日を中心として行われる。新暦になって一月遅れの十月に行うようになり、新北神社―十九日、太田神社―十九日、大堂神社―二十九日であった(現在は当番集落により未定)。

神輿のおくだり、おのぼりに獅子舞いや浮立がお供をし映画や演芸もあって賑わった。家庭では赤飯・鮎の昆布巻などのくんち料理で親戚や知人を招いた。

また、おくんちは衣がえの目安でもあった。



おくんち (野町公民館)



三重、新北神社

5 亥の子の餅

旧暦十月の亥の日にボタ餅をつくって収穫を祝う。

大堂神社では、十月十三日に芋の子祭りともいって子孫繁昌と豊作を祈願して祭りをする。

6 お日待

旧十月十四日より若者が寄って餅をつき、精進料理で一夜を過ごし、翌十五日は未明に起きて川で禊をして日の出を拝み太陽に感謝をする。この日は魚もんで精進落としをした。

7 村祭り

秋の収穫が終わり一息ついた霜月(旧十一月)になると、農村部の集落では村祭りが行われる。セツカンマツイ(赤飯祭り)といわれるように、子供から老人まで村人全員が集まって赤飯を腹いっぱい食べて豊作を感謝する祭りで、第二次世界大戦前までは各組毎に免田(祭田・共有田)があったので、その年の当番が耕作し収穫した米は祭りの神饌とし直会で神とともに食べた。陣内では十二月十八日に行われる。子供たちは祭りの数日前から薪木を拾



村祭り(陣内)

い集め、当番の家から藁をもらい、祭りの前夜に太鼓を打ち鳴らしながら田の中でホンゲンギョウをする。当日は当番の家で赤飯を蒸し集落中のハシのとれる者全員が集まって赤飯を食べ、昼は青年たちの世話で戸主が集まって夕方迄酒宴が続けられた。

他の集落の祭りもほぼ同じである。いくつかの集落の祭り日を記しておく。為重―旧十月十五日、赤飯祭り、渡端―旧十一月第二亥の日、弁財天祭り、三重―十二月十五日、いしき祭り。

四 民間信仰

路傍や寺社の境内に造立されているおびただしい数の石仏・石塔・堂宇などは民間信仰の遺物であるが、今日でも最も身近かな信仰の対象としてさまざまな願いがよせられている。そして、これらの神仏の祭りや講は、年中行事や家の行事のなかに災害防除・家内安全・病氣平癒などの祈願行事として組み込まれている。

(一) 観音信仰

町内に現存する堂庵には観音を本尊とするものが多く、観音の結縁日である十七日には主婦を中心として毎月